

# 玉虫厨子白鳳説を再批判する

—— 村田治郎博士の反論に答えて ——

上 原 和

は し が き

先年上梓をみた拙著「玉虫厨子の研究——飛鳥・白鳳美術

様式史論——」(初版、日本學術振興会刊、昭和三十九年八月)

に対して、はからずも諸先学より数多くの御批評<sup>(1)</sup>かつ励ましのお言葉を辱<sup>(2)</sup>くすることをえたのは、浅学非才の身にとってはこの上ない欣びであり、感謝に堪えないところであったが、わけても建築の諸問題に關して、いわば論争の相手方とも云うべき村田治郎博士より、再三きびしい拙論批判<sup>(3)</sup>が寄せられたことは、その批判の可否は別としても、なおその後の私の考えを發展させる上で裨益されるところ少くなかったのであり、博士の度々の真摯な応酬に対して心から謝意を表する次第である。ともあれ、玉虫厨子問題が

昨今ようやく斯界の注目を集めはじめてきていることは、問題の提起者としては何よりの喜びであるとともに、責任の重大さをも痛感せずにはいられないのである。

## 註

(1) 参考までに拙著に寄せられた諸先学の批評掲載の書名並びに雑誌名を挙げておくと左のとおりである。

(一) 水野清一「法隆寺」(平凡社版「日本の美術」4 昭和四〇年八月) 四一—四四頁。

(二) 吉川逸治「日本美術入門」(平凡社版「日本の美術」1 昭和四一年一月) 四五頁。

ちなみに、以上の水野・吉川両著における拙論の紹介と採用によつて、玉虫厨子絵の主題に關する卑見はおうむね学説としての公認を見るに至ったものである。昭和二九年

に玉虫厨子絵の主題に関する処女論文を発表してからすでに十余年を経ていることを思うと、いささか感なきをえない。両先生の御好意に対して深く感謝する次第である。

(三) 竹内理三「日本歴史」第二〇一号書評(吉川弘文館、昭和四〇年二月)一〇八頁。

拙著全体にわたつての懇切な紹介であるが、玉虫厨子絵に関する卓見に対して賛同の意を表されておられるとともに「美術史に門外漢である筆者も、著者の『即物的、歴史的に』論をすすめている本書に幾多の同感を覚えざるを得なかった。本書の通説に反する論に対して、美術史家・建築史家のうちで最も多くの意見を寄せられているのは村田治郎博士であるが、その反論の如何にも説得力のなさを感じざるを得ない。おそらく古代美術史は、根本的に書き改めねばならないであろう。なお著者は、法隆寺・大安寺両寶財帳にみえる宮殿像と奈良時代文献にあらわれる宝殿との区別を時代的用語の差異とされたが、宮殿像は切妻式屋形のもの、宝殿像は四角又は多角(八角)の四注造、頂上に宝形類をのせた宝塔形式のものを示すものではなからうか。門外漢の思いつきである」と評されておられる。

(四) 史学会「史学雑誌」(第七四篇五号「一九六四年の歴史学界―回顧と展望」古代、昭和四〇年五月)六七頁。

(五) 野間清六「古美術」第六号書評(三彩社、昭和三十九年一〇月)一二五頁。

(六) 井上 正「国華」第八七四号書評(国華社、昭和四〇年一月)三八頁。

(七) 山根有三「東京大学新聞」第五九四号書評(昭和三十九年一月九日)。

(八) 井上 正「日本読書新聞」書評(昭和三十九年九月二二日)。

(九) 杉山二郎「週刊読書人」書評(昭和三十九年一〇月三一日)。

(十) 久野 健「図書新聞」書評(昭和三十九年一〇月三一日)その他に、同書収録以前の「成城文芸」所収論文に対する論評として左のものがある。

村尾次郎「奈良時代の文化」(至文堂版「日本歴史新書」昭和三十七年七月)一八九頁。

伊野部重一郎「上原和氏の『玉虫厨子制作年代考』を読み法隆寺被災問題に言及す」(続日本紀研究)第八卷第二二号、昭和三十六年十二月)九頁。

松原三郎「千仏像考」(「美術史」第四十八冊、昭和三十八年三月)一一八頁。

なお私信ではあるが、浅野清博士より「法隆寺伝法堂を寄進した橘夫人は橘三千代ではなく正三位橘夫人とあるように聖武天皇夫人であった人」という御教示を辱くした。

(2) 村田治郎「二つの法隆寺様式論(中)(下)」(「史迹と美術」第三五七、第三六一号、昭和四〇年八月、同四一年一月)

村田治郎「玉虫厨子の諸考察」(「仏教芸術」第六三号、昭和四一年二月)一頁。

村田治郎「玉虫厨子続考」(「仏教芸術」第六七号、昭和四三年三月)一頁。

ところで、村田博士の拙論批判についてであるが、もともと博士の拙考への批判は、現在の法隆寺建築を依然として飛鳥様式の流れとのみ目しておられる博士の法隆寺様式観<sup>(1)</sup>、なかならず玉虫厨子の制作年代を法隆寺金堂より後のものと見做して法起寺三重塔の年代に比定しておられる博士の玉虫厨子白鳳末期説<sup>(2)</sup>に対して、玉虫厨子を飛鳥様式、法隆寺金堂を白鳳様式に属するものと見做す私の立場からなされた村田説批判に対する、博士の側からの反論であり一部からはその論争の帰趨が注目されてもいたのである。

しかし、私は、村田博士の最初の反論、すなわち、「史迹と美術」掲載の論文<sup>(3)</sup>に対してはあえて沈黙を守ってきた。博士の反論にかなり感情的な昂ぶりが感じられたからであり、そのために時として白を黒と云いくるめかねない点もなくはなかったからである。それは誰れしもが陥りがちな論争の陥穽であり、他ならぬ私みずからが戒心を要する点でもあった。私はただひたすら私の拙ない村田説批判

が学愚少なからざる博士の心情をいかに大きく傷つけてきたかを、改めて思わざるをえなかったのである。

ところが、そうした私の沈黙に対して、博士は再度の批判において、すなわち「仏教芸術」63号掲載の「玉虫厨子の諸考察」(昭和四二年一月刊、以下「仏芸」63号論文と呼ぶ)において「建築の部分だけについては私が対象となっている関係から、上原説がすべて成立しない(傍点筆者)ことを一応書いておいたつもりであるから」と云う、思いもかけぬ一方的な断定をもって酬いておられるのであり、そればかりか、さらに余勢を駆って、玉虫厨子を、天平初期と見做されている海竜王寺五重小塔の年代にまで繰下げるというエスカレートぶりを示しておられるのである。

以上のことは、私としてはまことに心外に堪えないことであり、加えて、その後村田博士のこうした玉虫厨子白鳳末ないしは天平初期説の驥尾に付し、玉虫厨子の年代を七世紀半ばから後のころと見做し、あまつさえ見紛ふ余地もないほど明らかな飛鳥様式の玉虫厨子の絵画に対して、何の論拠もなくこれを古い粉本を手本とした擬古作と見做す、全く無定見な村田説追蹤の論者<sup>(4)</sup>まで現われるに至っては、私としてもようやく事の重大さを認識せざるをえないのである。

玉虫厨子について、いみじくも故野間清六氏は、かつて拙著への批評文のなかで、「いわばこの厨子一つが未解決であるために、日本の上代美術史は五里霧中でもあるのだ。貴重な遺品はまた厄介な障礙物にもなっているのである。(中略)まさにこれは天王山のようなもので、もしこれを陥れるものがあれば、飛鳥・白鳳の美術を制することができるからである。」と述べておられるが、まさしくその通りであり、宮殿形の小仏龕にしか過ぎぬこの一具に、一時代の建築・彫刻・絵画・装飾文様(金工および彩色)のすべてが網羅されているために、玉虫厨子の制作年代が飛鳥・白鳳の何れに擬せられるか、その帰趨如何は、日本上代の美術史の組立に影響するところきわめて多大であることを、今更ながらに痛感せざるをえないのである。

奇妙なことに、我が国の美術史研究においては、とかく建築の領域のことは一切これを建築史家にのみまかせて、他がこれに容喙することをタブーとするような傾向が顕著に見受けられるが、これは一部建築史家の偏狭さもさることながら美術史家の側の怠慢でもあり、芸術史研究者としては甚だ当をえないものと云わざるをえないのである。

村田説に追随して、玉虫厨子の年代を白鳳に擬し、その絵画を古い粉本による擬古作と見做しておられる町田甲一

氏の御説にも、甚だ疑問を禁じえないのであるが、本稿においては問題を建築の領域にのみとどめて、村田博士の御批判に答え、さらに新たな御教示をえたいものと思う。

なお、村田博士の「仏芸」63号論文を拝読して以来、この一年余に部分的には博士の反論に答えた拙稿もすでにあり、重複している問題も少くないが、稿を追うごとに私の考えも発展してきているので、さらに御批判を乞う次第である。また、近々、「増補玉虫厨子の研究」が出ることになっているので、村田博士とのこれまでの論争の経緯を両者の出拠原著に照らして、何れが是か非か客観的に御検討戴ければ幸いである。

#### 註

- (1) 村田治郎「支那建築史より見たる法隆寺建築様式の年代」(「宝雲」第三十六冊、昭和二年四月)。
- (2) 村田治郎・上野照夫「法隆寺」(毎日新聞社、昭和三年七月)五一頁。
- (3) 前出、五一頁。
- (4) 町田甲一「法隆寺」(角川新書版、昭和四年二月)一三四頁。
- (5) 野間清六「玉虫厨子の研究」書評(「古美術」第六号、三彩社、昭和三年一〇月)一二五頁。

(6) 拙稿「玉虫厨子」(「古美術」第一七号、三彩社、昭和四二年四月) 四七頁。

美術史学会研究発表「玉虫厨子の建築様式年代について」  
(美術史学会第二〇回総会、於京都大学、昭和四二年五月二〇日)。

拙稿「法隆寺の雲形斗拱について——法隆寺様式におけるパロツクのなるもの——」(「美学」第七〇号、昭和四二年九月) 二二頁。

拙稿「法隆寺と玉虫厨子」(一)、(二)、(三)(「国華」第九〇四第九〇五、第九〇六各号、昭和四三年五月、七月、九月)

(7) 拙著「増補玉虫厨子の研究——飛鳥・白鳳様式史論——」(巖南堂書店、昭和四三年八月)。

## 一、玉虫厨子と法起寺三重塔について

——雲形斗拱の原型とその形式変容について——

玉虫厨子の制作年代を白鳳末期と見做す村田博士の御説が、はじめて提起されたのは、上野照夫氏との共著「法隆寺」(毎日新聞社、昭和三五年七月以下「法隆寺」論文と呼ぶ)においてであり、その中で博士は次のように述べておられる。

「(玉虫厨子の)制作年代は法隆寺金堂の細部に比べて、古式の円垂木<sup>まるとろぎ</sup>だが直線<sup>ちくせん</sup>でなくて反りがついており、雲形斗拱にもまた反りがついて軽快さが加わったほか、金堂の雲形斗拱または雲形斗<sup>まき</sup>のような彫こみがない点などから考えると、様式的には金堂よりもちに造られたとしかいえない。もっとも、垂木や雲形斗拱の反りという点は工芸的なものと実際の建築との相違もあらうから、それらを考慮に加えても、玉虫厨子の宮殿にみなざる洗練された作風は、法起寺三重塔あたりと比較すべきものかと思う。つまり第七世紀の後半のうちでも末期ころらしく、あるいは第八世紀初葉までくだることもあらう。」

すなわち、以上のように、ここで村田博士が法隆寺金堂との比較の上で玉虫厨子を法隆寺金堂より後のものと見做しておられる論拠は、まず第一には、法隆寺金堂のものにおいては一切反りが認められなかった雲形斗拱や垂木の上に、玉虫厨子では明瞭に反りが見られ、そこに軽快な、洗練された作風がうかがわれる、という点において、第二には、法隆寺金堂の雲形斗拱の両側面に見られた筋彫が玉虫厨子のものにおいては一切見られないという点において、それぞれ法起寺三重塔の作風ないしは形式的特徴に相通うものがあり、したがって玉虫厨子の制作年代は当然法起寺

三重塔年代に比定されるべきである、と云うのである。

それゆえ、ここに擬せられている第七世紀末から第八世紀初葉という年代は、法起寺三重塔の年代であり、聖徳太子伝私記亦名古今目録抄記載の法起寺露盤銘文のなかに見えている三重塔の完工年代、すなわち露盤の上げられたという文武天皇慶雲三年（七〇六）を考慮に入れてのことと見做して差支えないであろう。法起寺三重塔の完工年代がおよそこのあたりの年代に擬されてしかるべきことは、同じ法隆寺系建築に属するとはいえ、法隆寺金堂と法起寺三重塔との間に見られる形式変容の著しさからも十分に窺われるところである。

ちなみに、法隆寺金堂の完工年代については、さきに町田甲一氏より村田博士の天武朝説を駁する持統朝説が提出されているが、法隆寺金堂をして「天武天皇の八年（六七九）にはまだ着工されず、持統天皇七年（六九三）には少くとも金堂は完成していた」ものと見做しておられる町田説は、法隆寺伽藍縁起并流記資財帳に見えている、

合通分繡帳式張 具帶廿二条 鈴三百九十三

右、納賜淨御原宮御宇天皇者

という記載の、淨御原宮御宇天皇を、ことさらに誤って持統天皇に擬した上での立論であり、明らかに謬説である。

何故ならば淨御原宮御宇天皇は、同じく大安寺伽藍縁起并流記資財帳の記載に

繡菩薩像一帳

右、以丙戌年（筆者註―天武天皇没年の朱鳥元年）七月、奉為淨御原宮御宇天皇皇后并皇太子、奉造請坐者

と見えているように、まぎれもなく天武天皇そのひとをさしているのであり、法隆寺資財帳に見えている繡帳二張の法隆寺施入が天武天皇によってなされたものであることは明らかである。なお、法隆寺・大安寺両資財帳の記載例は勿論のこと、紀および風土記、その他金石文の記載例に至るまで、淨御原宮御宇天皇と記されているときは、すべて天武天皇をさし、持統天皇と混淆されて用いられている例は唯の一例もこれを見出すことは出来ないのであり、飛鳥淨御原宮御宇天皇の場合は天武・持統両天皇の何れかであり、飛鳥宮御宇天皇というときは持統天皇のみをさしているのである。以上のことは、つとに拙稿において繰返し詳述し来たところであるが、これまで町田氏の眼に触れる機会を逸していたものとすれば、まことに遺憾である。

さて、淨御原宮御宇天皇がまぎれもなく天武天皇をさしており、繡帳二張の法隆寺施入が天武天皇によるものである

るとすると、法隆寺金堂の完工年代は、天武朝下と見てまず差支えないということになるのであるが、さらにまた、法隆寺資財帳に見えている食封参戸の己卯年停止、すなわち、天武紀八年（六七九）己卯年）四月の条に見えている「諸の食封有る寺の所由を商量りて、加すべきは加し、除むべきは除めよ」という食封に関する詔によってなされたこの食封停止の措置とあわせ考えるときには、天武朝のおよそこの時期ごろまでには、法隆寺金堂はすでに落慶を迎えていたものと見做されうるわけである。それゆえ、いわば六七〇年代様式とでも称すべき法隆寺金堂の建築と、その完工年代が慶雲三年（七〇六）に擬されている法起寺三重塔とでは、年代の上に優に三十年もの開きが見られるわけである。また、このことは、法隆寺資財帳に見えている法隆寺の五重塔の塑像群と、中門の仁王像との造像年である和銅四年（七一）をもつて、それぞれの完工年代と見做している法隆寺五重塔・中門との場合と全く同様である。かりに町田氏の持統朝説に倣って、法隆寺金堂の完工年代を六九〇年代におくときには、法隆寺金堂と法隆寺五重塔や中門、或いは法起寺三重塔との年代差は著しく小さくなり、建物自体の示す実状、すなわち、同一細部の示す形式変容の著しき、作風の懸隔の大きさに比して、あま

りにも年代差が小さ過ぎることになるのである。

ところで、玉虫厨子もまた村田博士が云われるように、法起寺三重塔同様に法隆寺金堂から三十年ほど遅れて作られた白鳳末期様式に属するものなのであろうか。玉虫厨子と法起寺三重塔との間には、はたして村田博士が指摘なされておられるような様式上の親縁性が認められるのであろうか。本稿においては、主として、玉虫厨子、法隆寺金堂、そして法起寺三重塔三者の雲形斗拱に見られる形式変容の実態に焦点を合せながら論を進めてゆきたい。

さて、そこでまず最初に、玉虫厨子と法起寺三重塔との雲形斗拱に関してであるが、村田博士の御説に疑問が生ずるのは、雲形斗拱の上に筋彫を見ないという点ではたしかに両者は一致を見ているとはいふものの、翻って垂木や雲形斗拱の上に見られる反りの有無ということになると、両者は完全に相違を示している点についてである。すなわち法起寺三重塔においては、垂木にも雲形斗拱にも反りは一切見られず、その点では、法起寺三重塔はかえって玉虫厨子よりも法隆寺金堂との間に一致を見せているのであり、とくに垂木においては、玉虫厨子の垂木が反りのある一軒の円垂木であるのに対して、法隆寺金堂も法起寺もともに反りのない一軒の角垂木である、というまぎれもない事実

は、これだけを見ても法起寺塔の細部が、玉虫厨子に對してよりは、むしろ法隆寺金堂の方に近いことを誰の眼にも示している。加えて一軒の円垂木の方が一軒の角垂木より年代が先行することは、すでに建築史における常識と云つてよい。

とすると、玉虫厨子が法起寺三重塔の様式年代に擬せられる所以は、もはや両者の具体的な細部形式の一致にあるわけではなく、博士のお言葉をかりて云えば、両者に相通う洗練された作風における一致にあるということになるわけであるが、では博士は一体、法起寺三重塔のどこに「玉虫厨子の宮殿にみなぎる洗練された作風」に相通うものを見出しておられるのであろうか。大体、洗練された作風という云い方からして大変に曖昧であるが、博士は仏芸63号論文のなかで、玉虫厨子の雲形斗拱に触れて、

「つまり実際の建築よりもよほど動的になり、かつ一手先<sup>ひとてさき</sup>を加えて進歩している。尾垂木を先端でささえた材を私は反ったといい、伊東先生は反転したと書かれたが、その上端の曲線<sup>うわば</sup>はちょうど肘木のささぐり（笹削、みずくり）水削、せぐり（背削）の大きな幅のものであって、それが上方の尾垂木の反りとよく調和しているのは見のがせない。私はこんな手法を洗練

されているという。」

と述べておられる。この説明で、村田博士の云われる洗練の意味が大略理解されえたわけであるが、しかしそれだけに、両者ともに洗練されているという理由で、玉虫厨子を法起寺三重塔に比定なされている点がいよいよ判らなくなるのである。と云うのは、雲形斗拱について云えば、法起寺三重塔の雲形斗拱は、洗練された作風と呼ぶには、あまりにも鈍重であり、退化的であり過ぎるからである。

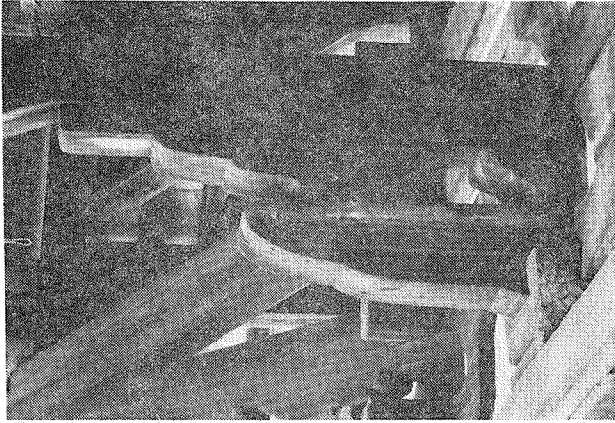
法起寺三重塔が洗練された作風をもっているということ<sup>(11)</sup>は、かねてから一部では云われてきたところである。たしかに法起寺三重塔は、法隆寺金堂とこれを比べるとときには屋根の勾配も緩く、円柱のエンタシスも膨らみが著しく減少しており、何よりも装飾を有しない点、塔全体からうける印象は、法隆寺金堂や同五重塔よりは軽快である。しかし、それはあくまでも法隆寺の金堂や五重塔に比べてのことであって、玉虫厨子に見られる軽快さとは比べべくもないのであり、造形的な性質を異にしているのである。

ところで、玉虫厨子と法起寺三重塔との造形的性質の差異をきわめて著しく見せているのは、何よりも両者の雲形斗拱である。もともとこの二つの雲形斗拱は、これらを法隆寺金堂の雲形斗拱に對比するときには、たしかに若干の



類似を示している。すなわち、法隆寺金堂の雲形斗拱の上に見られた、その圧倒的な量体的緊張のきわめて著しいダイナミズムは、玉虫厨子、法起寺三重塔何れの雲形斗拱の上にも見られるが、こうした法隆寺金堂の雲形斗拱の持つ激しい動勢に比べると、は、ともにスタティックである点において一致する。

法隆寺金堂の雲形斗拱に見られるダイナミズムにあずかって力のあった渦文状の筋彫が、玉虫厨子や法起寺三重塔の両方の雲形斗拱の上にも見られ



挿図1 法起寺三重塔雲形斗拱

ないことは、すでに述べたところである。(挿図1参照)

しかし、ここで注意を要することは、法起寺三重塔の雲形斗拱の場合は、法隆寺金堂の雲形斗拱において見られたように、本来その形態とともに不可分にあるべきはずの筋彫が、ここでは退化的に消失しているのであり、そうした退化現象から生じたダイナミズムの喪失であり、そこからきた静態化である点である。また同様に、そうした形式退化の現象は、一見法隆寺金堂の雲形斗拱と寸分違わぬように見える法起寺三重塔の雲形斗拱の輪郭の上にも、すなわち形態それ自体の上にもかなり大きな変化となって現われてきていることも見逃されてはならない。それは壁面より挺出している隅および平の雲形斗拱の上にもっともよく現われてくる。すなわち、法隆寺金堂の隅・平両雲形斗拱では斗に相当する部分の中央上縁に半月形の浅い凹形が見えているのであるが、法起寺塔の場合はこれがすっかり消失しており(法隆寺の五重塔および中門では形が縮小されながらもなお残存しているのであるが)、さらにその斗に当る部分自体の下部のくびれが、つまり、斗線りに当る箇所が法隆寺金堂のものに比べると著しく太くなっているのである。すなわち、胴のくびれが弱く、いわばずん胴形であり、雲形斗拱本来の形態上の特徴である歪みの屈曲度とそ

の緊張度が、ここではもはや低いものとなっているのである。また、こうした雲形斗拱の歪みの形態にさらに立体的変化を与えるのに役立ついた下端の薄い平たい突出部、いわゆる舌もまた、ここではすでに失われているのである。

すなわち、法隆寺金堂の雲形斗拱において、形態の歪形化と筋彫の動勢とは、生命力に溢れる奔放なダイナミズムの一体的表現として不可分のものであり、本来切り離されてはならない性質のものである。にも拘らず、法起寺三重塔では、輪郭線のみが、それも著しく形式化されて残存しているに過ぎないのであり、いわゆるかたちの生命はすでに喪失してしまっているのである。法起寺三重塔の雲形斗拱をあえて退化的と呼ぶ所以であり、この鈍重な、鈍重ゆえにステイックな法起寺三重塔の雲形斗拱を、軽快な、洗練された作風と見做す村田博士の御観察には、いささか組しかねるのである。

ちなみに、現存する法隆寺系建築における隅・平雲形斗拱の様態を図式的に比較しておくと、およそ次のとおりである。すなわち、

- (1) 法隆寺金堂……筋彫あり、斗部上縁中央に大きな半月形の浅い凹形あり、斗部下方のくびれ強し、

舌あり。

- (2) 法隆寺五重塔……筋彫なし、斗部上縁中央に小さな半月形の浅い凹形あり、斗部下方のくびれ金堂のものと同略同じ、薄い舌あり。

- (3) 法隆寺中門……筋彫なし、斗部上縁中央にやや大きな半月形の浅い凹形あり、斗部下方のくびれ金堂のものと大略同じであるが、外方の斗部先端肥大化を示す。舌なし。

- (4) 法起寺三重塔……筋彫なし、斗部上縁中央に浅い半月形の凹形なし、斗部下方のくびれ肥大化を示す舌なし。

以上の比較からみても、一連の法隆寺建築のなかでは、法隆寺金堂の雲形斗拱が最先行し、他の三建築がそれに倣って続いていることが十分に看取されうるはずであるが、このうちとくに法隆寺中門と法起寺三重塔のものにおいて、その形式化、すなわち退化現象の著しいことが判る。なお、法起寺三重塔の雲形斗拱に、退化現象を見てとり、鈍重と見做す点では、福山敏男博士と私見とは完全な一致を見る。すなわち、福山博士もまた法起寺三重塔について、

「法起寺塔のは太りすぎたという感じで、曲線の流れも鈍重である点は、法隆寺中門のと似ている。もち

ろん舌はないし、上部の半月形のくぼみも忘れられて  
いる。雲形組物も、いよいよ終点にきたという感が深  
く、時期的にも最後に位するであろう。」

と述べておられるのである。

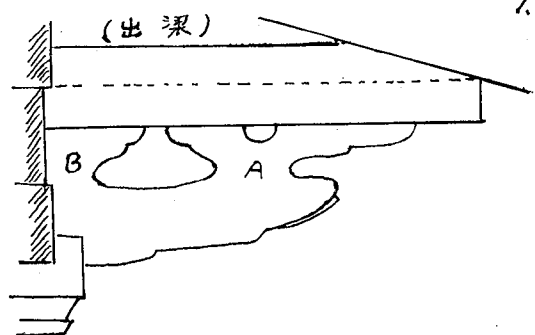
では、こうした法起寺三重塔の鈍重なる、鈍重なるがゆ  
えにスタイツクであった退化的雲形斗拱に対して、他方  
玉虫厨子の雲形斗拱が、法隆寺金堂の雲形斗拱に比べて著  
しくスタイツクであるのは、一体如何なる理由によるも  
のであろうか、が次に問題となるはずである。そこで、こ  
んどは玉虫厨子の雲形斗拱と法隆寺金堂の雲形斗拱との比  
較がなされなければならない。

法隆寺金堂の雲形斗拱においてきわめて特徴的なのは、  
すでに繰返し述べてきたように、形態の著しい歪形性であ  
り、ダイナミックな動勢である。これに対して玉虫厨子の  
雲形斗拱において注目されるのは、そのリズムカルな整齊  
性であり、線条的な動勢である。すなわち、法隆寺金堂の  
雲形斗拱においては、斗拱とは云うものの、すでに斗の形  
も肘木の形もともに著しく歪形化され、癒着し合い、斗と  
肘木との接合部位はもはや見定め難くなり、もはや斗拱本  
来の構築的品格は全くあとをとどめてはいない状態である  
が、玉虫厨子の雲形斗拱においては、斗と肘木との組合せ

関係はなお構築的であり、斗と肘木との接合部位も分明で  
あり、斗の形はその輪郭線が角を失い丸くなって鏡餅を逆  
さに重ねたような上拡がりの斗形になっているとはいえ、  
なおも依然として斗形本来の左右相称形を保っている点が  
注目されるのである。すなわち、法隆寺金堂をはじめとす  
る一連の法隆寺系建築の雲形斗拱を支配するもつとも基本  
的な造形原理は、歪形への意志であり、左右非相称形の原  
理であったが、玉虫厨子の雲形斗拱においては、歪形なら  
ぬ整形への意志が支配しており、左右相称形の原理がなお  
も生きているのである。

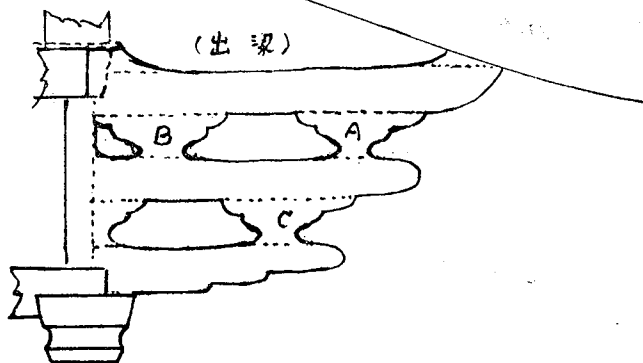
かくして、玉虫厨子の整形的雲形斗拱と、法隆寺金堂の  
歪形的雲形斗拱のその何れが先行するか、もはや誰の眼に  
も明らかにはずであるが、さらに玉虫厨子の整形的雲形斗  
拱の祖型として、漢代の灰陶楼閣（天理参考館蔵）に見ら  
れる三重の出桁受斗拱を置くときには、玉虫厨子の雲形斗  
拱が如何にして生れてくるか、容易に察しえられるのであ  
る。すなわち、漢代楼閣の出桁受斗拱においては、壁面か  
ら軒下まで挺出された大きな迫持の上にまず一斗が載り、  
その一斗はまず壁面と平行の水平肘木を受け、その肘木の  
上に二斗を載せ、その二斗はまたして壁面と平行の水平肘  
木を受け、その上にこんどは三斗を載せ、その三斗が軒桁

法隆寺金堂



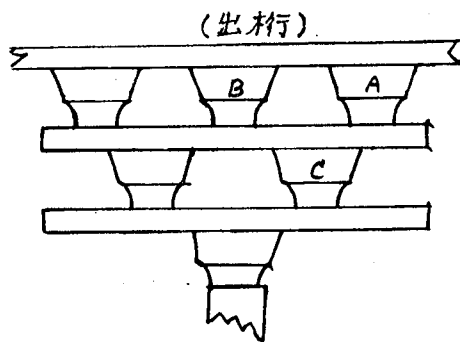
1.

玉虫厨子



2.

漢代灰陶構閣



3.

挿図2 雲形斗拱の形式変容 (1は筋彫省略)

を受けているのであり、斗と肘木と交互に積み上げ、さらに斗を肘木をはさんでW型に並べてゆく仕方は、その構築法において、玉虫厨子と全く軌を一つにしており、壁面と平行のこの出桁受けの斗拱をそのまま向きを変えてこんどは出梁を受けるべく壁面から挺出させれば、まさしく玉虫厨子の雲形斗拱の祖型となるのである。(挿図2参照)

なおその際、漢代楼閣の模型の斗形が、玉虫厨子の皿斗つき大斗の場合と同様に、斗の側面が内転びに切られていることを見逃されてはならない。何故ならばこうした上拡がりの斗形は漢魏以来の伝統的な手法であり。斗繰りは半円弧形をなしその下に皿斗がつくのが普通である。こうした上拡がりの斗の側面の抑揚に満ちた輪郭線からは、玉虫厨子の雲形斗拱の斗の部分に見られた鏡餅を逆さに重ねたような形が現われるのはすぐのことである。

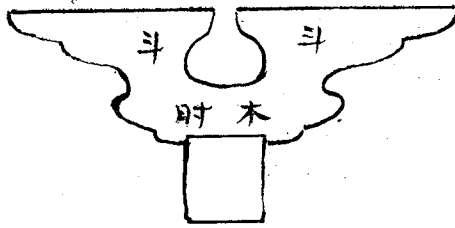
以上によって、隅・平雲形斗拱の形式変容のあとに徴するかぎり、玉虫厨子が法隆寺金堂に先行し、また法起寺三重塔が一連の法隆寺系建築のなかの最末期に位置するであろうことは、もはや疑いえないところとなったわけであるが、なお駄目を押すために、出桁(丸桁)受雲形斗拱の形式変容のあとをもあわせてたどっておきたい。

出桁受雲形斗拱の場合も、その祖型となるものはやはり

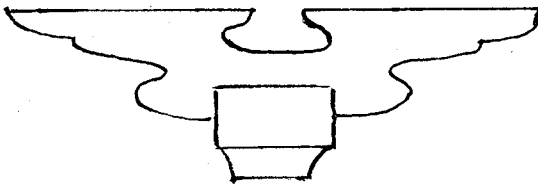
漢魏の伝統とも云うべき、水平肘木の上に載った二つ斗の出桁受斗拱と見做されうる。この二つ斗の出桁受斗拱の二つ斗の間隔が著しく接近して、遂に一体化してしまったのが、玉虫厨子や一連の法隆寺系建築に見られる雲形斗拱と云ってよい。それゆえ二つ斗の出桁受斗拱の原型に近ければ近いほど、すなわちそれぞれ斗の原型を保っていればいるほど先行形式ということになる。いま玉虫厨子と法隆寺金堂との出桁受雲形斗拱とを比較するとき、玉虫厨子の出桁受雲形斗拱においてはまだ容易に二つ斗からの変形であることが理解されるが、法隆寺金堂のものでは歪形化が著しく、二つ斗は完全に癒着し合い、あたかも鳥禽が翼を拡げているような形を呈しており、玉虫厨子のそれを仲介にしないかぎり、この鳥禽が翼を拡げた形の雲形斗拱を、原型の二つ斗に結びつけることは、なかなか容易なことではない。ここでも、玉虫厨子の雲形斗拱が法隆寺金堂のそれに先行することは、もはや疑いえない事実として、かたちそのものの上に実証されているのである。

すなわち、ここで玉虫厨子および法隆寺金堂をはじめとする一連の法隆寺系建築の出桁受雲形斗拱を比較するとき、きわめて興味のあることは、原型の二つ斗の斗拱から遠ざかるにしたがって、斗と斗の間の虚空間の輪郭が、つま

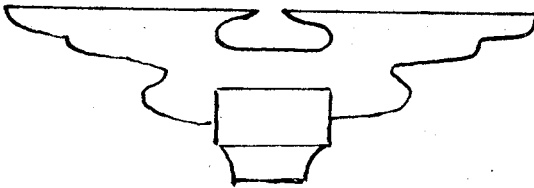
1. 玉虫厨子



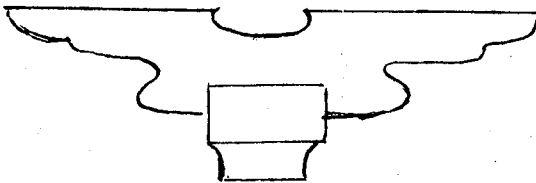
2. 法隆寺金堂



3. 法起寺三重塔



4. 法隆寺五重塔



挿図3 出桁受雲形斗栱の形式変容 (二つ斗の斗間空間の変容)

り出桁受雲形斗拱の上端<sup>うわは</sup>の真中に見えている凹形が、円壺形から扁平円壺形となり、さらに扁平椀形へと変化してゆくのである。と云うことは、二つ斗の向き合った側の斗形と斗線のくびれとの名残りの輪郭線が次第に本来のかたちを失ってゆくその過程を現しているものであり、二つ斗形から二つ斗の癒着したいわば拡翼形状への変容過程が示されているのである。そこで、こうした出桁受雲形斗拱上端の凹形（虚空間）のかたちの変化を追ってゆくと、玉虫厨子の円壺形、法隆寺金堂の扁平円壺形、同五重塔および中門の扁平椀形、という順で、形式変容がなされていることが、容易に理解されるのである。すなわち、ここでも玉虫厨子の出桁受雲形斗拱が法隆寺金堂のそれに先行していることは、もはや誰の眼にも明らかである。（挿図3参照）

なお、ここで出桁受雲形斗拱の凹形のかたちに關してとくに興味をおぼえるのは、法起寺三重塔の場合である。すなわち、その上端の凹形は、一見したところでは法隆寺金堂のそれと全く同形の扁平円壺形のように見える。しかしよく注意して見ると、法起寺塔のものには、微妙ながらもそこに新たな造形意匠が現われていることに気がつく。つまり、その扁平円壺形はいよいよ扁平さを増し、薄い扁平槽円形として完結しようとしているのである。すなわち、

二つ斗の向き合った内側面の輪郭がいよいよ原型の斗のたちからは離れて、その上端の肩部は水平の織い線径形の突起となつて、扁平円壺形の凹形の上縁を包みはじめているのである。ところで法隆寺金堂の出桁受雲形斗拱において、もっとも特徴的なのは、その隅・平雲形斗拱の場合と同じく、筋彫によって強調された動勢であり、それが形態の歪形性に一層の表現力を与えていたのであるが、五重塔・中門においては、前述のような形態の変容とともにその筋彫も消失してゆき、雲形斗拱本来の歪形性から云えば退化現象をきたすことになる。ところが法起寺三重塔の場合には、その退化現象のなかに新たな造形性の芽生えが見えているのである。それが先きほど指摘した、法起寺塔の出桁受雲形斗拱の上端に現われた、きわめて繊細な水平線条の突起形である。微細な箇所であるが、それは、法起寺三重塔の円柱に見られる繊細感、塔全体から受ける軽快さと相通う造形感覚であり、たしかにそこにはいわば玉虫厨子的な造形感覚への近似が見られる。

しかし、それが決して、年代の同一性からくるものではないことは、玉虫厨子および法隆寺金堂をはじめとする一連の法隆寺系建築の雲形斗拱の上に見られる形式変容を通して、すでに明らかにされたところである。玉虫厨子が法

隆寺金堂に先行することは、もはや誰しも疑いえないところであり、玉虫厨子の制作年代を、法起寺三重塔の年代、すなわち、白鳳末期におくことの誤りであることは、もはや自明のことと云えよう。

そればかりか、法隆寺金堂の歪形の雲形斗拱が、直接に玉虫厨子の整形の雲形斗拱から着想され模倣されたものであることもまた疑いえないところである。法隆寺の雲形斗拱が軒の支承組織としては構造的にきわめて不合理でありすぐに破綻をきたしているのも、工芸品である玉虫厨子の斗拱がそのまま模倣されたためと云えよう。<sup>(13)</sup>

#### 註

- (1) 既出「法隆寺」五一頁。
- (2) 高楠順次郎・望月信寧編「聖德太子御伝叢書」(金尾文淵堂、昭和一七年九月)三二頁。  
顯真筆帖子本「聖德太子伝私記 亦名古今目録抄」に、現在の法起寺三重塔にはすでに紛失している露盤の銘文が記されているわけであるが、法起寺三重塔の建立に関しては、至千乙酉<sup>(推古)</sup>十四、白鳳惠施僧正。将<sup>レ</sup>竟<sup>二</sup>御願<sup>一</sup>。構<sup>二</sup>立堂塔<sup>一</sup>。而丙午年三月。露盤宮作。  
と見えている。

- (3) 町田甲一「法隆寺と薬師寺」(「美術史」第六〇号、昭和四一年三月)一二四頁。
- (4) 「大日本古文書」二(東京帝国大学、明治三四年二月)五九六頁。
- (5) 前出、六二八頁。
- (6) 拙稿「文献上より見た玉虫厨子の制作年代について」(「成城文芸」第一八号、昭和三四年五月)一頁。  
拙著「玉虫厨子の研究」飛鳥・白鳳美術様式史論」(昭和三九年三月)九五頁。  
拙稿「法隆寺と玉虫厨子」(「国華」第九〇四号、昭和四三年五月)一八頁。
- (7) 既出「大日本古文書」二、六二一頁。
- (8) 「日本書紀」下(岩波版日本古典文学大系68、昭和四〇年七月)四三五頁。
- (9) 既出「大日本古文書」二、五八二頁。
- (10) 既出「玉虫厨子の諸考察」一五頁。
- (11) 天沼俊一「日本建築史要」(三訂増補版、飛鳥園、昭和七年四月)四四頁。
- (12) 「世界美術全集」2、日本(2)飛鳥・白鳳(角川書店、昭和三六年二月)図版26雲形肘木、一五二頁。
- (13) この問題の詳細については、拙稿「法隆寺の雲形斗拱について―法隆寺様式におけるパロディ的なもの―」を参照して戴きたい。



## 二、玉虫厨子と海龍王寺五重小塔

### について

— 反りの問題をめぐって —

さて、さきに法起寺三重塔の年代に擬せられていた村田治郎博士の玉虫厨子白鳳末期説は、その後さらに「仏芸」63号論文において、

「玉虫厨子の尾垂木と垂木との両方に反りのある様式は、海龍王寺五重小塔以後の作品とほぼ一致する」

として、玉虫厨子の年代を天平初頭までさがるかも知れないとさえ考える、と述べておられる。

ところで、この海龍王寺五重小塔の年代についてであるが、実年代は今日なお不明であるが、様式的には薬師寺東塔に続くものと見做されており、もし海龍王寺創立の頃の作とすれば天平初年（七二九）あたりまで遡りうるであろう、と云われている。

すでに、玉虫厨子の雲形斗拱と、法隆寺金堂をはじめとする一連の法隆寺系建築の雲形斗拱との比較をとおして、玉虫厨子が優に法隆寺金堂に先行することはもはや疑いないわけであり、いまさら玉虫厨子を海龍王寺五重小塔前後の年代に比定される村田説に、年代論としては答える必要

はないように思われるが、しかし様式論としてはなお興味のある問題なので、はたして村田博士が指摘されるように、玉虫厨子と海龍王寺五重小塔とは、ともに尾垂木と垂木との両方に反りがあるから、というそれだけの理由で、様式的にはほぼ一致するものかどうか、一応検討しておきたいと思う。

なお、村田博士は、この「仏芸」63号論文のなかで玉虫厨子の尾垂木に関して、

「法隆寺金堂以下の実際建築の尾垂木は一直線であるのに、玉虫厨子では反っている。実際の建築の尾垂木の先端は、ほとんど垂直（少し強く云えば多少外転<sup>そとこころ</sup>び）の方向に切りおとしているのに対し、玉虫厨子の尾垂木の先端は内転びの方向に切られている。この反りと先端の切りかたは、玉虫厨子の方が年代的にのちものであることを示している」

と述べておられるので、尾垂木の先端の切り方の問題もあわせて論じてゆきたい。

尾垂木の反りの問題はともかくとして、玉虫厨子の尾垂木の先端が内転びに切られていることが、何故垂直に切られている法隆寺金堂の尾垂木より年代的に後のものであるか、納得のゆく博士の御説明がないのでいまもって一向に

不明であり、加えて、博士によって、玉虫厨子と様式的に  
ほぼ一致するものとされている海竜王寺五重小塔の場合に  
は、かえって玉虫厨子とは相反して外転びに切られている  
状態なので、まずもって博士の御説に矛盾をおぼえないわ  
けにはゆかないのであるが、しかし様式論としては、後述  
のように玉虫厨子の尾垂木の先端の内転びは大いに注目さ  
れてしかるべき問題である。

さて、まず玉虫厨子と海竜王寺五重小塔との尾垂木、円  
垂木に見られる反りの問題であるが、まずはじめに疑義を  
抱かざるをえないのは、これを取扱われる村田博士の方法  
的な御態度についてである。すなわち、博士は尾垂木の反  
り、垂木の反りを玉虫厨子の全体、或いは他の諸細部から  
切り離して、「尾垂木と垂木との両方に反りのある様式」  
を海竜王寺五重小塔以後の天平建築に求めておられるので  
あるが、偶々、特定の一細部の形式が合致したというそれ  
だけのことで、様式的一致が云われていることに甚だ疑問  
を抱かざるをえないのである。様式の問題は、しよせん或  
る対象に個有の表現の仕方、すなわち、表現形式の如何を  
問うことを措いてはならないはずである。玉虫厨子や海竜王寺  
五重小塔の様式的一致が云われるためには、両者の建築全  
体のもつ表現性、の一致がもとめられなければならないはず

である。しかし、玉虫厨子と海竜王寺五重小塔との間に  
は、尾垂木や垂木の反りなど一部の細部形式の一致にも拘  
らず、建築全体としてはきわめて明瞭な表現上の対立が見  
出されるのである。尾垂木、垂木に見られる反りも、それ  
ぞれの建築の全体のなかで、あらためてその表現上の意味  
が見直される必要があるものと思われる。

さてそこで、まず問題になるのが屋根のかたちである。

木造の寺院建築の場合、その外観を大きく左右するのは屋  
根のかたちであり、その屋根と軸部との関係の具合である  
が、玉虫厨子と海竜王寺五重小塔との間には、その点に関  
してきわめて大きな相違が見られる。まず、屋根のかたち  
について云うと、玉虫厨子の屋根は覆う型の屋根であり、  
海竜王寺五重小塔の屋根は開く型の屋根である。すなわち  
玉虫厨子の屋根に著しい特徴は、鏝葺の問題をしばらく措  
くとすれば、何よりも屋根の勾配の急峻なることであり、  
また異常なほどの軒の出の深さである。それに対する軸部  
の瘦身がいよいよ玉虫厨子の覆う屋根の性格を著しいもの  
にしている。これに対して、海竜王寺五重小塔の屋根は、  
勾配はきわめて緩かであり、軒先は空を指して水平方向に  
開いているのである。開く屋根と称する所以である。その  
際、屋根に反りがあり、垂木にも、尾垂木にも反りが見ら

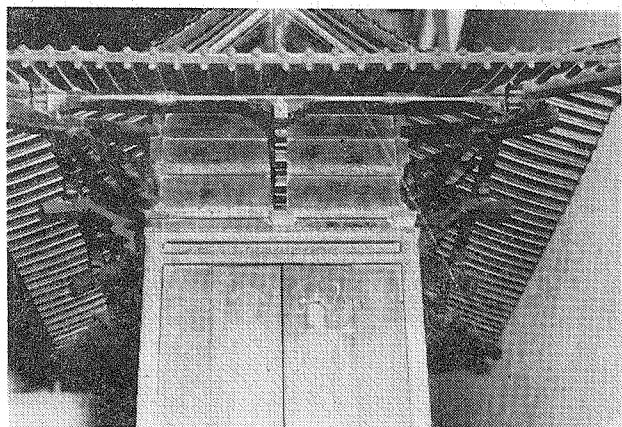
れることは、両者には共通している。

ところでここで改めて注目すべきことは、このような玉虫厨子における覆う、屋根と海竜王寺五重小塔における開く、屋根とは、当然のことながら軒の組物や軒廻りの空間の性質を異ったものになっている点である。すなわち、まず玉虫厨子の雲形斗拱について云えば、何よりもその反りの性質に注目せざるをえないのである。玉虫厨子の雲形斗拱においては、實際建築の出梁に当る最上段の横材の上端に凹曲線が見られ、その先端は尾垂木を支えるべく上方に反転しているのであるが、そうした尾垂木を撓み上げる反りは、じつは玉虫厨子の雲形斗拱の最下段の肘木に当る横材の壁面より挺出しているその付根からすではじまっているのである、雲形斗拱の外方先端全体が撓みのつよい大きな拋物線を描いて尾垂木を、と云うより軒先全体を撓み上げているのである。すなわち、勾配の急峻な、反りのつよい、そして驚くほど深い軒の出をもつ玉虫厨子の、覆う、屋根に對する拮抗力として働いているのである。同様に、屋根の反り、尾垂木の反り、そして垂木の反りが、軒先近くでわずかながらも反転を示しているのも、やはり覆う、屋根に對する拮抗力として作用しているのである。玉虫厨子の屋根が、その覆う性格の著しさにも拘らず、輕快感をあたえて

やまないのは、そのためである。これに對して、海竜王寺五重小塔における尾垂木の反り、垂木の反りは、開く、屋根自体の上方への指向にしたがって、同方向へと反り上がっているに過ぎないのである。

こうした、覆う、屋根と開く、屋根との對比において、さらに注目されるのは、その軒廻りの空間である。すなわち、軒と軸部とははさまれた空間の性質の相違についてであるが、玉虫厨子の軒廻り空間は、いわば秘められた、沈黙の、虚の空間であり、これに對して、海竜王寺五重小塔のそれは、開かれた、にぎやかな、実の空間である。玉虫厨子の軒廻り空間がいかに通き間の多い虚の空間であるかは、近寄って下から軒廻りを文字どおり覗いて見るとときにいやが上にもつよく実感されるのであるが、軸部の壁面の高さもさることながら、軸部より放射状にそれぞれ一方に向にのみ挺出しているだけの雲形斗拱が、軸部の廻りを帶狀に囲んでいる出組の斗拱に比べていかに虚の空間の形成に大きな役割を果しているか、を思ふべきである。玉虫厨子においては、軸部の正面と背面の二つの平雲形斗拱が、壁面より直角に挺出することなく、正面を開いてそれぞれ斜め前方に挺出しており、また普通には当然三方向に挺出されるべき軒隅においても、隅雲形斗拱は斜め前方の一方

にしか挺出を見ていないので、雲形斗拱の壁面よりの挺出は、四囲何れからみても放射状をなしているために、斗拱と斗拱との間の虚の空間は著しく大きなものとなっているのである。しかも、それぞれの雲形斗拱自体、斗形と斗形との間の透き間空間の大きさは、これを法隆寺金堂の雲形斗拱と比較するときに、何よりもよく理解されるはずである。(挿図4参照)



挿図4 玉虫厨子宮殿軒廻り空間(模造)

構築された三手先の斗拱が厚い帯となってぐるりを囲み、さらには軒天井を張りめぐらし、また軒先には二軒の垂木が畳み込まれているのである。こうしたにぎやかに填充された実の空間は、軒が上方へ開かれることによっていよいよ量体的な膨張性をましてゆき、また見せる性質を大きくしてゆくことになるのである。それは、玉虫厨子の虚の空間に見られた秘かさ、雲形斗拱のシルエットの抽象的な線条性と比べて、きわめて対照的である。

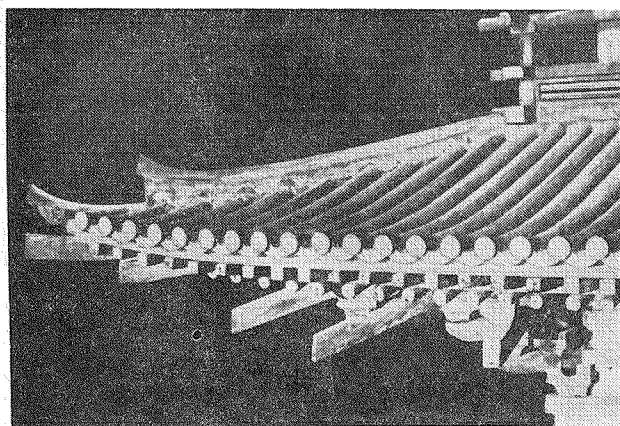
ところで、玉虫厨子におけるこうした虚の空間の表現は、ひとり軒廻りにおいてのみならず、じつは玉虫厨子の全体に見られるものである。すなわち、軒の出の異状に深い屋根と、基壇をのせて思いきり四方に広く張り出している<sup>かまち</sup>框座との間に、軸部をはさんで、やはり大きな虚の空間が形成されているのである。それを玉虫厨子の側面から、軸部の片側のみ見ればC字形虚空間と呼ぶことも出来ようし、軸部の左右両側を合せて見るときにはx字形虚空間と呼ぶことも許されよう。また、玉虫厨子の宮殿部のみならず、須弥座にもまた上下框によってx字形の虚空間が形成されているのであるが、この宮殿部・須弥座二重ねのx字形は、まさしく玉虫厨子須弥座背面に描かれた須弥山図の山岳形そのものであることに、誰しも気がつくことと思

う。山岳形といえ、玉虫厨子絵に描かれている山岳表現すべてが「Y」字形モチーフの集積であることを、あわせて指摘しておきたいのである。

ところで、では玉虫厨子におけるこうしたC字形虚空間すなわち、屋根と軸部と框座によって形成された虚の空間を、深く引緊った空間にするために、玉虫厨子の諸細部においてどれほどの造形的配慮がなされているであろうか。驚くべきことは、軒廻りの諸部材に、また基壇や框座に、上下相呼応して緻密かつ周倒な造形的配慮がなされていることを発見するのである。すなわち、軒廻りにおいては、まず尾垂木の先端が、内転びに切られているのはじまって、続いて雲形斗拱の肘木の先端も段々状に内側へと短くなってゆき、その最下段の肘水の付根にある皿斗つき大斗の側面も皿斗の側面も共に内転びに切られ、かくして軒先から軸部方向へと撓みのつよい凹曲線が描かれることになるのである。それに対して、こんどは基壇ないし框座では、雲形斗拱先端の段々状に呼応して段々をなし、下方から軸部へ向って大きく凹曲線を描くことになるのである。さらにここで興味が深いことには、宮殿正面取付け階段の踏み面が外転びに切られていることである。普通階段の踏み面を広くするために内転びに切る配慮の仕方はある。し

かし、反対にここで踏み面が外転びに切られているのは、視覚的な配慮以外の何ものでもないはずである。かくして正面階段の段々に至るまで軸部中心へと向う緊張した凹曲線を促すことになるのである。

玉虫厨子の尾垂木先端の内転びは、こうしたC字形虚空間の形成の上から、すなわち、玉虫厨子全体の統一された造形的表現の上から、あらためて見直されるべきである。なお、C字形の凹曲線といえば、玉虫厨子において皿



挿図5 海龍王寺五重小塔軒隅

斗つき大斗の斗線の刳形もまたC字形の凹曲線をなしているのである。ところで、この軸部C字形凹曲線は、覆う屋根の反り、すなわち屋蓋部C字形凹曲線とは、軒先において接触反転して、たがいに拮抗し合って、動勢のバランスをとり合っているのである。

これに対して、海竜王寺五重小塔の場合も、その尾垂木の外転びは、やはり開く屋根との関連において造形的に意味づけられることになるのである。すなわち、そのことがもっともよく理解されるのは軒隅においてであり、ここでは尾垂木、隅木、稚子棟というふうに順を追うてその動勢は上方を指向して反り上り、それぞれの先端は外転びの度を増して切られてゆくことになるのである。すなわち、天を指して開いてゆくことになるのである。これが、海竜王寺小塔における開く屋根と、尾垂木・垂木の反りとその先端の切り方との造形的ないわば因果関係である。(挿図5)

ちなみに、同じ天平建築と云っても、唐招提寺金堂の場合、覆う型の屋根なので、その覆う屋根との関連によって、尾垂木先端の切口は、玉虫厨子同様、内転びを示すことになるのである。

玉虫厨子も、海竜王寺五重小塔も、何れも繊細にして周到な建築模型であり、それぞれ軽快な、洗練された作風を

示している。細部形式の一致を見る箇所もある。しかし両者が、全く別箇の造形意思にもとずいた作品であり、決して同一の様式に属するものではないことは、以上によって理解されたことと思う。玉虫厨子を海竜王寺五重小塔の年代に、すなわち白鳳末期ないしは天平初期におく村田治郎博士の御説に重ねて疑義を呈する所以である。

なお、最後に、玉虫厨子の屋根の問題に関連して、その鍔葺について、附言しておきたい。

玉虫厨子の屋根において、反りとともに見逃されてならないのは、鍔葺である。鍔葺は、構造的には入母屋造の原始形に過ぎないのであるが、外観的には入母屋造とその表現の性格を大いに異にしているのである。玉虫厨子の場合、とくに注目されるのは、鍔葺の段落線が屋根の面を大きく截ち切る水平線として働き、切妻の垂直截線に相対している点であり、玉虫厨子の屋根においては、そうした垂直・水平の両直線と、反りの凹曲線とが線条的に、整齊的に、そして繊細微妙に交響し合っているところに、尽きることのない造形的妙味が感じられるのである。

ちなみに、こうした垂直線と水平線とによる直線的モチーフとC字形反転凹曲線を主体とする凹曲線的モチーフによって、その見事な諧調によって、玉虫厨子の造形は成り立っ

ているのである。それは音楽のソナタ形式のなかで展開される第一主題と第二主題との関係に似ている。ところで、そうした直線と凹曲線とによって構成される造形の、線条的、整齐的な抽象的、性格が、じつは玉虫厨子におけるものとも基本的な表現的性格であり、他から自らを分つ個有の様式的特徴と見做されうるのである。

かつて、鍔葺の有無をもって、はたして玉虫厨子を法隆寺系建築から分つことが出来るか、と云うことで村田博士と私との間に応酬が交わされたことがあったが、玉虫厨子の屋根の鍔葺は、玉虫厨子における直線的造形のきわめて重要な様式的表徴として、宮殿軸部に見られる装飾楣材や装飾角柱など、或いは須弥座の框など、玉虫厨子の直線的造形を構成するすべての垂直・水平両モチーフとの有機的な関係のもとで、あらためてその様式的意味が見直されてしるべきものに思われる。同様に、法隆寺金堂の場合に於てもその入母屋造の強烈な撓みのもつダイナミズムは、当然、雲形斗拱の歪形に見られるダイナミックな動勢、円柱の膨らみ、或いは勾欄の人字形収首の撓みなどとの様式的関連において把えられるべきである。そうした様式的把握のまえには、玉虫厨子の鍔葺と、法隆寺金堂の入母屋造とは、構造的に同じであるがゆえに、という発想が如何に当

をえないものか、よく理解されうるはずである。

ところで、玉虫厨子に見られる鍔葺の入母屋造の様式年代についてであるが、さきに私は推古三十年（六二二）銘のある天寿国繡帳の鐘楼図の家屋形にも、百濟扶余郡窺岩面外里出土の山景文画埴の家屋形にも、それぞれ鍔葺の入母屋造が見えているところから、玉虫厨子の鍔葺も、朝鮮三国（六朝）様式を踏むものと見做しておいたのであるが、村田博士は「簡単な線でえがいた略面にすぎないから」と疑義をはさんでおられる<sup>(6)</sup>。しかし、有光教一氏の報告にもあるように「家屋は入母屋造で玉虫厨子の如き鍔葺の屋根を有し、上に一雙の鷗尾を挙げた様を判然と示している」ほど精緻にして明確であり、この扶余出土画埴の家屋形が鍔葺であることに一点の疑いも見出しえないのである。

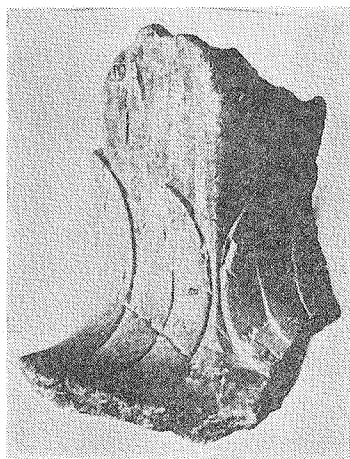
なお、一九五七年に四川省牧馬山東漢墓より陶楼平房の家屋形（四川省博物館蔵）が発掘されているが、この東漢の家屋形にはきわめて明瞭に鍔葺が示されているのである。北魏の、少くとも延昌二年（五一三）までには造像されたものと見做されている竜門石窟古陽洞右壁面には、まぎれもない入母屋造の屋形龕が見られ、しかもその屋根にはすでに反りが看取されうるのである。私は何故村田博士が、玉虫厨子の鍔葺を朝鮮三国（六朝）様式に結びつける

ことを頑なに拒まれるのか、また、鍛葺をふくめて瓦葺の入母屋造が我が国に現われる時期を、あえて大化改新前後にまで繰下げなければならぬのか、甚だ理解に苦しむのである。

なお、ここに、玉虫厨子の鴟尾についても一言しておきたい。村田博士は、かねがね玉虫厨子の鴟尾様式を白鳳ころと見做し<sup>10)</sup>、

「その曲線の性質から判定すると、四天王寺や明石市大久保の白鳳期初頭ころの鴟尾と奈良朝末期の形をしめす唐招提寺金堂の鴟尾との中間に位置づけるのが適當のようである」(傍点筆者)

と述べておられるが、偶々筆者は、この度奈良国立博物館において催された飛鳥・白鳳古瓦展(昭和四三年四



挿図6 山田寺址出土鴟尾残欠

月二七日(五月二六日)において、飛鳥寺址出土鴟尾残欠をはじめとする飛鳥・白鳳期の鴟尾をつぶさに実見する機会をえて、玉虫厨子の鴟尾の、その曲線ないしはその曲面の性質が、實際建築の出土鴟尾のおよそ何れの年代のものに比定されるべきものかをよく理解することが出来た。

すなわち、私の見るところでは玉虫厨子の鴟尾の造形的な性質は、現在我々の見ることの出来る出土遺品例に徴するかぎり、山田寺址出土鴟尾の残欠(井内功氏蔵)にもっとも近く、しかも山田寺例の胴部に重り合っている羽根状の鱗形は、玉虫厨子のそれと全く同形であり、その重なり具合も両者は全く軌を一にしているのである。

さて、では玉虫厨子の鴟尾と山田寺例とに共通して見られる造形的性質とは、如何なるものであろうかが問題になるのであるが、両者に共通して見られる著しい造形的特徴は、鴟尾胴部の内側、すなわち鴟尾の背梁に当る部分にきわめて明瞭に尾根状の稜線が見られることであり、その稜線自体深く彎曲した撓みのつよい凹曲線を示しているが、何にもまして注目されるのは、そうした鋭角的な背梁をhasんで鴟尾胴部の左右側面がそれぞれ反りのある凹曲面体をなしている点である。(挿図6参照)

こうした玉虫厨子や山田寺例の凹曲面体の鴟尾胴部に見



られる反り、を、さきに村田博士が玉虫厨子の鷗尾の曲線の性質に相い通うものありとして挙げられた四天王寺出土例や兵庫高丘瓦窯出土例の白鳳初期と見做されている鷗尾や唐招提寺金堂の天平末期の鷗尾とに共通して見られる凸曲面体の胴部の膨らみに比較するとき、その瘦肥の対照は誰しもの眼にも明瞭すぎるほど明瞭である。すなわち、前者と後者との間には、曲線の性質、曲面体の性質の上に大きな相違が見出されるのであり、いかに村田博士の御提言とは云え、玉虫厨子の瘦の鷗尾を四天王寺出土例や高丘瓦窯出土例の、或いは唐招提寺金堂の一連の肥の鷗尾の間に並べて、その年代を考えるわけにはゆかないのである。

山田寺出土の鷗尾については、先般の飛鳥・白鳳古瓦展目録（奈良国立博物館）の解説もまた、これを法輪寺例と比較して、「山田寺例は胴部にかさなりあう鱗形を表現していて、むしろ祖型的である」と述べているが、鱗形の表現もさることながら、すでに山田寺例や玉虫厨子の鷗尾の造形的性質そのものが、本邦最古の出土例と見做されうる飛鳥寺出土の鷗尾残片と、その硬質的、鋭角的な細身の瘦体性において相い通うものがあることも見逃されてはならないわけである。

ところで山田寺例については、その出土がはたして山田

寺址であるかどうかいまだ確認されてはいないように聞いているが、その当否の如何に拘らず、山田寺例ならびに玉虫厨子の鷗尾の年代は、その造形的特徴から見て、やはり山田寺金堂の建立年代である皇極天皇二年（六四三）<sup>(1)</sup>の時点より下るものではないものと見做されうる。

なお、玉虫厨子の鷗尾に関して大方の注意を促しておきたいのは、鷗尾の腹部に見られる鳥の肛門部を現わした猪目形の空穴である。空穴の底部に鋭い尖起を有するのが特徴であるが、こうした逆ハート形の空穴は、朝鮮三国時代およびその影響下にあった仏教公伝前後の我が国の金銅透彫飾文として、仏教非仏教何れの遺品の上を問わず盛行を見た二重嵌め込みの逆ハート形飾文、すなわち蟠螭文系唐草の一種のいわゆる蟠螭形中心飾文<sup>(2)</sup>に見られる特有の空穴形であり、玉虫厨子の金銅透彫飾文のほとんどすべてが、こうした猪目形の空穴を有する逆ハート形飾文のヴァリエーションで覆われていることは周知のとおりである。ちなみに、法輪寺出土鷗尾の腹部では普通の円形の空穴が見られるばかりである。

以上のように、鷗尾の上から見た玉虫厨子の様式年代も到底白鳳以降に下るものではないことが諒解されえたはずである。

なお最後に、反りの問題に関連して、玉虫厨子の平行極にも附言しておく、玉虫厨子が法隆寺建築に先行する朝鮮三国様式直模の飛鳥様式を示すものとすると、ここで問題になるのは玉虫厨子の一軒の平行極についてである。すなわち、北魏雲岡石窟の諸例で見られるように六朝時代に盛行を見たものと見做されている一軒の扇極とその配列形式を異にするからである。村田博士は法隆寺系建築の一軒の平行極の祖型を神社建築に求めておられるのであるが、私は平行極、すなわち配付極の手法はやはり六朝末の中国建築にその起源が索められるべきものと思う。何故ならば、隅木の横っ面へ極を取付けるこの配付極の手法は、もともと軒に反りを与えるために工夫された手法であり、屋根の反り、軒の反り、或いは極の反りなど一連の反りへの指向と切離して考えてはならないのである。

現に敦煌石窟隋代壁画四二〇窟西壁維摩變の入母屋造の家屋図<sup>13</sup>には一軒の配付極が見えているのである。ちなみに、これが唐代壁画になると二軒となっている。また、北齊武平元年（五七〇）の造像と見做される河北省定興県石柱上家屋形にすでに二軒の配付極が現われていることは注目されてよい。

私は法隆寺金堂の一軒平行配列の反りのない角極は、玉

虫厨子の一軒平行配列の反りのある丸極からの変形と見做しているのである。法隆寺金堂の細部が、いかに多くのものを玉虫厨子に負うているかは、すでに雲形斗拱において見てきたところである。

#### 註

- (1) 既出「玉虫厨子の諸考察」一六頁。
- (2) 福山敏男「日本建築史」古代（『建築学大系』4 第三版、彰国社、昭和三十九年一月）八八頁。
- 浅野清「奈良の寺院」『原色日本の美術』3、小学館、昭和四一年一〇月）一四九頁。
- (3) 前出「日本建築史」古代、八八頁。
- (4) 既出「玉虫厨子の諸考察」一五頁。
- (5) 既出「玉虫厨子の研究—飛鳥・白鳳様式史論」一八二頁参照。
- (6) 村田治郎「二つの法隆寺様式論」中（『史迹と美術』第三五七号、昭和四〇年八月）二五〇頁。
- (7) 有光教一「朝鮮扶余新出の文様磚」『考古学雑誌』第二七卷第一号、昭和十二年一月）一〇頁。
- (8) 四川省博物館「四川牧馬山灌溉渠古墳清理簡報」『考古』一九五九年第八期）四二五頁、図版陸。
- (9) 水野清一・長広敏雄「竜門石窟の研究」（座右宝刊行会、

昭和一六年九月)一〇三頁、七九図。

(10) 村田治郎「玉虫厨子統考」(『仏教芸術』第六七号、昭和四年四月)一四頁。

(11) 狩谷望之証註「上宮聖德法王帝説」(岩波文庫版、昭和一六年二月)一三二頁。

(12) 既出「玉虫厨子の研究—飛鳥・白鳳様式史論」三七六頁、四五五頁参照。

(13) 敦煌文物研究所編「敦煌壁画」(文物出版社一九五九年)一〇〇図。

(14) 劉敦楨「定興鼎北齊石柱」(『中国营造学社集刊』第五卷第二期民国二十三年)一二頁

## 結 び

私の玉虫厨子研究も、建築問題に関してはようやく最終的な結論に達したようである。

すなわち、それは法隆寺様式の最大の標徴ともいふべき雲形斗拱の原型が玉虫厨子の雲形斗拱であり、法隆寺金堂の雲形斗拱は玉虫厨子のそれを直接のモデルとして模倣され歪形化されたものであることがようやく明らかにされた

からである。法隆寺の雲形斗拱と全く軌を一にするものを中国・朝鮮に見出しえないのも当然のことと云えよう。雲形斗拱はもともと玉虫厨子における工芸品としての意匠として考案されたものであり、それが実建築に移され更に法隆寺独特の風土的歪形化がなされているからである。

思うに法隆寺建築は、玉虫厨子を直接のモデルとしている点で飛鳥様式の痕跡をきわめて多くとどめてはいる。しかし、法隆寺様式に見られるダイナミックな歪形性、量体的肉体性と、玉虫厨子のもつステイックな整形性、線条的抽象性との間には、明確な様式対立が存在する。それは飛鳥様式の風土化現象であるとともに齊・隋ないしは初唐様式の影響によるものである。

私は、隋・初唐様式の洗礼下にあるものを白鳳様式と見做しているのであり、その点で法隆寺様式はまぎれもない白鳳様式であるが、ここで注意すべきことは、法隆寺様式が白鳳様式のすべてを覆っているのではなく、別系統の、すなわち川原寺から藤原宮、薬師寺を結ぶ初唐色のおよい系統がむしろ主流として同時に存在していたことも見逃されてはならないのである。一連の法隆寺様式の方がむしろ特異であり、斑鳩を中心とする聖徳太子由縁の諸寺に流行をみたものと見做されうるのである。(一九六八、六)